

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の5年目)

1. 研究課題

龍門北朝窟の造像と造像記

Buddhist Sculptures and their Inscriptions in the Longmen Caves of the Northern Dynasties

2. 研究代表者氏名

稲本泰生

Inamoto Yasuo

3. 研究期間

2017年4月-2022年3月(5年目)

4. 研究目的

龍門石窟は東アジアで最も重要な仏教遺跡の一つである。本研究所東方学研究部の前身である東方文化研究所の水野清一・長廣敏雄は戦前に調査研究を行い、報告書『龍門石窟の研究』(1941年)を出版した。のちに『雲岡石窟』を出版する兩人による同書は、今日も基礎研究としての価値を失っていない。また龍門には夥しい数の造像記が遺っており、これについての研究も、清代以来の膨大な蓄積がある。水野・長廣が実施した現地調査は、僅か6日間にとどまった。このため多くの課題が後考に委ねられたが、戦後の中国における考古学の発展は、文字史料を造形資料から切り離すことなく相互に参照する研究を可能にし、新たな知見をもたらした。しかし北魏窟に限っても、開鑿の主体と過程、主要造像の編年など基本的なところで、今なお論者の見解が大きく分かれる部分が少なからずある。最近、龍門造像記の拓本多数が、所内で新たに確認されるに至った。本研究では研究所における石窟研究の伝統を継承し、北朝期の龍門における造像とその背景について、現在整理中であるこの資料群を活用して再考する。活動の中心に据えるのは造像記の文面の再確認と、内容の理解である。そこから得られる情報をもとに、石窟の造営経過や彫刻の様式・図像などの問題に対し、美術・考古・歴史・宗教・社会等の観点から総合的な検討を加え、今後の龍門研究の基盤となる共通認識の形成をめざす。

The Longmen Caves are one of the most important Buddhist sites in East Asia. In 1941, Mizuno Seiichi and Nagahiro Toshio from Institute of Oriental Studies (now Department of Oriental Studies, Institute for Research in Humanities) published the report "A Study of the Buddhist Cave-Temples at Lung-mên, Honan" after conducting fieldwork in the area. The report remains relevant to any research on the Longmen Caves today. Subsequently, the two scholars published

the paramount and highly acclaimed series entitled “Yun-Kang: The Buddhist Cave-Temples of the Fifth Century A.D. in North China” on the Yungang Caves in the 1950s. Since the Qing Dynasty, there have been many studies of the enormous number of inscriptions carved in the Longmen Caves. Yet since Mizuno and Nagahiro visited the site for a mere six days, many research topics had to be left to later scholars. In the development of archeology in postwar China, comparative analysis of both textual and stylistic sources has generated new scholarly insights for future research. Yet, even within scholarship concerning the Northern Wei caves of Longmen, opinions remain sharply divided on fundamental issues such as the commissioning and the construction process of the caves, as well as the dating of the major statues. Recently, the Institute of Oriental Studies has identified a rich collection of rubbings of the Longmen inscriptions. The proposed project therefore not only continues the institute’s tradition of researching Buddhist cave temples, but it also aims to reorganize and fully utilize the information gathered thus far to rethink Northern Dynasties statues and their context. The project thus focuses on reconfirming the transcriptions of the inscriptions and understanding their contents. Based on the information gained from that research, we shall consider issues such as the process of creating the caves and the style and iconography of the sculptures through a comprehensive study integrating art-historical, archeological, historical, religious, and social perspectives. In so doing, we hope to form a common foundation of knowledge that will serve as the basis for future Longmen studies.

5. 本年度の研究実施状況

コロナ禍の影響で基本的にオンライン、一部対面併用で研究会を実施した。龍門最古の窟で、造像記の数も最も多い（約700件）古陽洞の全壁面の検討が、前年度末を以て完了したことを承け、本年度は北朝窟のうち、文字史料の豊富さ（約80件）では同洞につぐ蓮華洞について、検討を行った。古陽洞のときと同様、造像記だけに注目するのではなく、無紀年・無銘分も含めた全ての造像について、壁面のブロック単位で網羅的に検討する作業を進め、2021年2月までに約三分の二を終了した。造像・造像記を検討する通例の会に加え、班長が「北朝六世紀前半期の仏伝図像若干について—安塞真武洞大仏寺第4窟など」、易丹韵氏が「南北朝～隋唐時代の須弥山図と法界仏像」、佐藤智水氏が「望ましき死後の世界のイメージ」造像銘から探る 予備的考察」、倉本尚徳氏が「隋代造像記からみた北周の廃仏と隋文帝の仏教復興—河北地域を中心として」と題する研究発表を行った。

6. 本年度の研究実施内容

- 2021-04-27 蓮華洞について 発表者 稲本泰生
- 2021-05-11 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高志緑 学振 PD 研究員
- 2021-06-08 研究報告：北朝六世紀前半期の仏伝図像若干について－安塞真武洞大仏寺第 4 窟など 発表者 稲本泰生
- 2021-06-22 研究報告：南北朝～隋唐時代の須弥山図と法界仏像 発表者 易丹韵 学振 PD 研究員
- 2021-07-13 研究報告：「望ましき死後の世界 のイメージ」造像銘から探る 予備的考察 発表者 佐藤智水 龍谷大学
- 2021-07-27 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高志緑 学振 PD 研究員
- 2021-10-12 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 稲本泰生
- 2021-10-26 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高橋早紀子 愛知学院大学
- 2021-11-09 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高橋早紀子 愛知学院大学
- 2021-12-14 蓮華洞北壁造像記の再検討 発表者 高橋早紀子 愛知学院大学
- 2022-01-25 蓮華洞南壁造像記の再検討 発表者 富岡采花 文学研究科
- 2022-02-08 蓮華洞南壁造像記の再検討 発表者 富岡采花 文学研究科
- 2022-03-08 研究報告：隋代造像記からみた北周の廃仏と隋文帝の仏教復興－河北地域を中心として 発表者 倉本尚徳

7. 共同研究会に関連した公表実績

人文研アカデミー2021 の企画として、オンライン連続セミナー『龍門石窟 ―研究の軌跡と現在』を、10月に四週連続で開催した。講師は当班メンバーの所員四名で、各々が専攻する美術史学・考古学・仏教史学の立場から、研究班の成果をまじえつつ、龍門石窟及び関連遺跡をめぐる諸問題について講述を行った。各回の担当及び演題は以下の通り。第一回（10月7日）：稲本泰生「龍門石窟の造像と石刻文―その歴史と近代人の視線」、第二回（同14日）：向井佑介「北魏洛陽の宮殿と寺院を掘る」、第三回（同21日）：倉本尚徳「唐代龍門石窟と浄土信仰」、第四回（同28日）：フォルテ・エリカ「龍門石窟と周辺の僧院―奉先寺址の発掘」。総計500名を超える聴講者があり、盛況であった。

8. 研究班員

所内

稲本 泰生、岡村 秀典、安岡 孝一、フォルテ・エリカ、倉本 尚徳、向井 佑介、佐藤 智水、高志 緑、易 丹韵

学内

内記 理(文化財総合研究センター)、檜山 智美(白眉センター)、富岡 采花(文学研究科)

学外

外山 潔(泉屋博古館)、齋藤 龍一(大阪市立美術館)、山名 伸生(京都精華大・総合人文学部)、大西 磨希子(佛教大・仏教学部)、石松 日奈子(東京国立博物館)、濱田 瑞美(横浜美術大)、北村 一仁(河南農業大)、篠原 典生(中央大・総合政策学部)、田林 啓(白鶴美術館)、高橋 早紀子(愛知学院大・文)、苜名 悠(大阪大谷大・文)、呉 虹(復旦大学・哲学学院)、アヴァンツィ・カルロッタ(秋田県立大)、王 砮人(京都国立博物館)、上枝 いづみ(金沢大学・人間社会研究域)、黄 盼(中国社会科学院・考古研究所)、常 鈺熙(北京大学・考古文博学院)、打本 和音(京都芸術大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	12	2	5	3	1	138	22	50	36	13
		(5)	(2)	(4)	(3)	(1)	(57)	(22)	(47)	(36)	(13)
国立大学	1	1					5				
		(1)					(5)				
公立大学	1	1	1	1			6	6	6		
		(1)	(1)	(1)			(6)	(6)	(6)		
私立大学		7		3	2		57		23	20	
		(4)		(2)	(1)		(35)		(13)	(10)	
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	3	3	1	1	1		13	1	1	1	
		(2)	(1)	(1)	(1)		(13)	(1)	(1)	(1)	
民間機関	2	2		1			9		9		
外国機関	4	4	3	3	3		38	3	25	25	
		(3)	(3)	(3)	(3)		(25)	(3)	(25)	(25)	
その他 ※											
計	12	30	7	14	9	1	266	32	114	82	13
		(16)	(7)	(11)	(8)	(1)	(141)	(32)	(92)	(72)	(13)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数
なし

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

12. 次年度の研究実施計画
なし

13. 次年度の経費
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2022年度は、すでに検討が完了した古陽洞の造像記について、研究所蔵拓の写真・釈文・解説を集成した資料集の出版に向けた編集作業を継続する。コロナ禍のため現地踏査による再確認が必要な事例の扱いが問題になるが、龍門石窟研究院とも連携して情報収集に努め、刊行までの時間の短縮に努める。また、当班における班員の研究発表に基づく論考数篇を、2022年度刊行予定の『東方学報』第九七冊への掲載に向けて投稿する。2022年4月に当班の後継班として発足した「東アジアの宗教美術と社会」では、過去五年で培ったノウハウを用いて龍門造像記の読解も継続的に行い、信頼度の高い釈文の蓄積を中心に、学界の共有財産となる基礎資料をさらに充実させていく予定である。同班の構想には、当班を進める過程で浮き彫りとなった、造像の担い手である個人・集団の属性や構造を把握することが、造像の様式・図像・制作過程などを理解する前提として、重大な意味をもつという認識が反映されている。文字史料の検討を一つの柱にしつつも、視野を東アジアの宗教美術全般に広げ、「社会との関係」にまつわる研究発表を積み重ねることによって、多様な対象の研究に応用可能な汎用性の高い史料として、龍門造像記を活性化することに貢献したい。